

日田条里遺跡飛矢地区2次

2018年

日田市教育委員会



遺跡遠景（西から）



調査区全景（西から）

序 文

この報告書は、当委員会が平成 27 年度に店舗建設工事に伴って発掘調査を行った日田条里遺跡飛矢地区 2 次調査の内容をまとめたものです。

調査では、弥生時代から古代にかけての建物や溝などが見つかり、特に古代の溝は規模が大きく、特別な施設と推測されます。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、地元田島地区の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に対するご理解やさまざまなご協力を賜りました関係者のみなさま、酷暑のなか作業にご尽力いただきました作業員のみなさま、そして発掘調査をあたたく見守っていただいた地元の皆様に、心より厚くお礼を申し上げます。

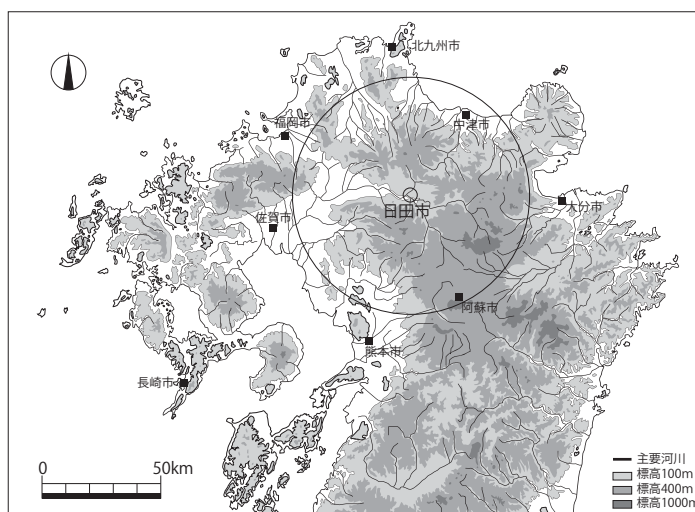
平成 30 年 3 月

日田市教育委員会教育長

三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は、平成 27 年度に市教育委員会が実施した日田条里遺跡飛矢地区 2 次の発掘調査報告書である。
2. 調査は店舗建設工事に伴い、九州労働金庫の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、事業主および地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
4. 調査現場での遺構実測は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、遺構製図もその成果品を使用した。
5. 調査現場での写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測・製図および遺物写真は、雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。
7. 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、その成果品を使用した。
8. 個別遺構図中の方位は全て磁北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。
9. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。
10. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆・編集は、行時が担当した。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

I 調査に至る経過と組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の内容	3
(1) 調査の概要	3
(2) 遺構と遺物	5
1. 竪穴建物	5
2. 掘立柱建物	5
3. 溝	5
4. 土坑	12
5. その他の遺物	12
IV 総括	14

本文写真目次

写真1 予備調査風景	目次下
写真2 作業風景	1
写真3・4 基本土層	4
写真5 3号溝西端土層	8

表目次

第1表 出土土器観察表①	15
第2表 出土土器観察表②	16
第3表 出土土器観察表③	17
第4表 出土石器観察表	18



写真1 予備調査風景

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 遺跡位置図 (1/4,000)	3
第3図 周辺地形図 (1/600)	3
第4図 遺構配置図 (1/200)	4
第5図 基本土層図 (1/40)	4
第6図 1・2号竪穴建物および竪穴周辺土層実測図 (1/60、土層は1/40)	6
第7図 1・2号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)	6
第8図 掘立柱建物実測図 (1/60)	7
第9図 1～4号溝実測図 (1/150、土層1/60、4号溝は平面・土層とも1/4)	8
第10図 1号溝出土遺物実測図① (1/4)	9
第11図 1号溝出土遺物実測図② (1/4、2/3)	10
第12図 2号溝出土遺物実測図 (1/4)	11
第13図 1～3号土坑・1号土坑出土遺物実測図 (1/40、1/4)	13
第14図 ピット出土遺物実測図 (1/4)	13
第15図 その他の出土遺物実測図 (1/4)	13

写真図版目次

巻頭写真図版	上：調査区遠景（西から） 下：調査区全景（西から）
写真図版1	上：調査区遠景（北から） 下：調査区全景（画面右が北）
写真図版2	上：1・2号竪穴建物と 3・4号溝と調査区壁面土層（北西から） 下：1・2号竪穴建物と4号溝切り合い付近土層
写真図版3	①掘立柱建物（南から） ②1号溝（南東から） ③1号溝断面土層 ④2号溝（南東から） ⑤2号溝断面土層 ⑥3号溝（南東から） ⑦1号土坑（北東から） ⑧2号土坑（西から）
写真図版4・5	出土遺物

I 調査に至る経過と組織

平成 25 年 10 月 4 日付けで九州労働金庫より市教育委員会あてに、日田市田島 2 丁目 262 ほか 3 筆について店舗用地造成工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書（事前審査番号 2013054）が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里遺跡に該当し、過去に近隣で遺跡が確認されていることから対象地にも遺跡が存在する可能性が非常に高いと考えられた。そこで、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後平成 26 年 5 月 15 日には予備調査依頼が提出され、これを受けて 6 月 5～6 日に重機と作業員による予備調査を実施した。この時点では建物の位置等の開発計画が固まっていなかったため、予定地の全面を対象に調査を行ったところ、水田面から約 35～40 cm の深さで弥生・古代・中世と考えられる溝 4 条や土坑・ピットが確認された。これらの遺構は開発予定地の全面にわたって確認され、中でも予定地北側で見つかった古代と考えられる一部の溝は方形に巡るようなコーナーが検出されたことから、通常の集落遺跡とは異なる様相が看取され、本調査に至れば相当の時間と費用がかかることになると思われた。その後決定された開発計画では、予定地は全面盛土を行ってこの溝のある予定地北半は駐車場として利用予定であり、店舗建物は南半となった。ただし建物は水田面から深さ約 4 m の地盤改良を伴う独立基礎構造であることから、基礎部分については遺跡の保存が困難であると判断し、これを中心とした範囲（調査面積 488 m²、掘削面積 348 m²）の発掘調査の実施に向けて開発主と協議を重ねた。その結果、平成 27 年 7 月 1 日に事業主と埋蔵文化財に関する協定および発掘調査の委託契約を取り交わし、7 月 9 日から 9 月 18 日までの間、発掘調査を実施した。また平成 28 年 11 月 1 日から平成 29 年 1 月 31 日の間整理作業を実施し、平成 29 年度に報告書作成を行った。現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

7 月 9 日 重機による表土除去開始

7 月 17 日 仮設電気工事実施

7 月 21 日 作業員による遺構検出開始

8 月 3 日 遺構掘り下げ開始、現水路および地下からの水の滲出と強粘性の遺構埋土に苦慮

8 月 20 日 調査補助業務開始

9 月 8 日 空撮実施

9 月 14 日 現場埋め戻し

9 月 15 日 仮設電気撤去

9 月 18 日 器材撤収、現地での作業完了

なお、平成 27～29 年度の調査組織は次のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三笠眞治郎（日田市教育長）

調査統括 柴尾健二（日田市教育庁文化財保護課長／27 年度）、池田寿生（同課長／28 年度）
梶原康弘（同課長／29 年度）

調査事務 園田恭一郎（同課埋蔵文化財係主幹／～27 年 9 月）、古賀信一（同係主幹／27 年 10 月～）
諫山温子（同主任／27 年度）、長祐一郎（同主査／28・29 年度）

調査担当 行時桂子（同主査）

調査員 若杉竜太・渡邊隆行（同主査）、上原翔平（同主任）

発掘作業員 井手基子、井上尊、梶原加代子、加藤祐一、合原建國美、小暮裕次、五反田静子、小柳大坂本隆、武氣直美、竹本和則、原田裕将、松下宣男

整理作業員 伊藤一美、高瀬真奈美、武石和美、立川幸子、吉田里美



写真 2 作業風景

Ⅱ 遺跡の立地と環境（第1・2図）

日田条里遺跡飛矢地区は日田盆地東部の標高約90mの沖積地にある。東方には市指定有形文化財の大原八幡宮を擁する大波羅丘陵をはじめとして盆地の東限をなす丘陵が連なり、これらの谷部から流れ出る小河川により形成された微高地に本遺跡は立地している。今回の調査区から南約50mの場所で行われた1次調査^(註1)では、弥生時代～古代の集落が確認されている。

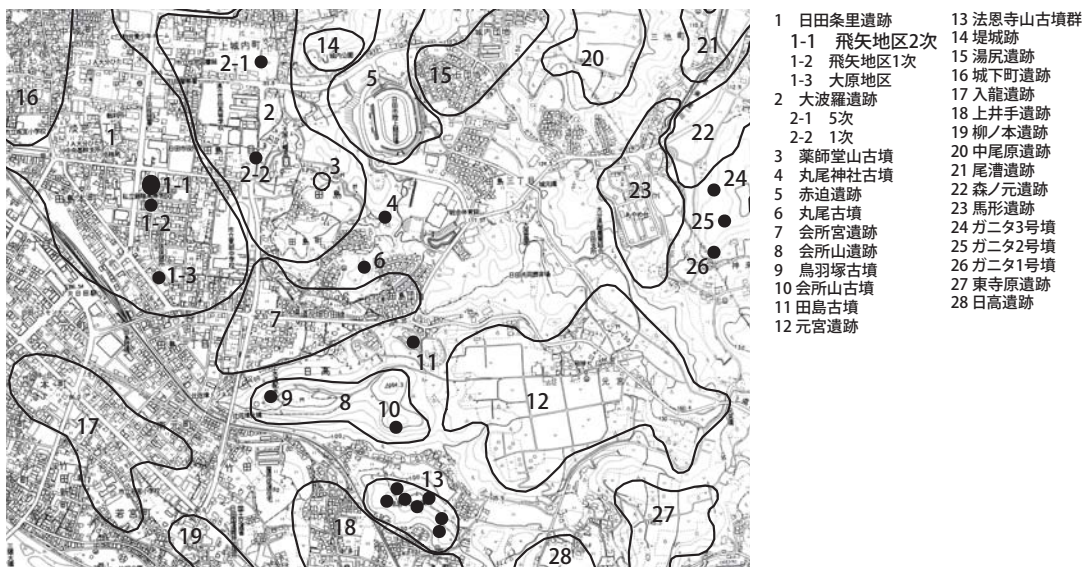
本遺跡は『豊後国風土記』にみえる日田郡五郷の一つである鞆編郷に属していたと考えられており、この鞆編郷は古墳時代後期の有力な豪族・日下部氏の拠点とされる。古くから文献に記されていることを証明するかのように、本遺跡の周辺では遺跡が数多く確認されている。以下、主な遺跡を概観する。

大波羅丘陵の北斜面にある赤迫遺跡(5)では弥生時代～古代の集落や古墳時代中頃の墳墓群が確認されている。大波羅丘陵と本遺跡の間に位置する大波羅遺跡(2)では弥生時代～古代の溝や古代の掘立柱建物のほか、直径30cm以上もの大きな柱木が立ったままの状態建物群を囲むように並んで見つかった大型柱穴列、5間×2間の四面庇付き掘立柱建物など、通常の集落の建物とは一線を画する遺構が見つかった。さらに「山」「田」銘の墨書土器や転用硯などが出土したことから、官衙関連施設と推測されている。大波羅丘陵南斜面には古墳時代中期の円筒埴輪が出土した薬師堂山古墳など複数の古墳が存在している。丘陵の南側に広がる沖積地には本遺跡と類似した立地条件で弥生時代～中世の集落が確認された日田条里遺跡大原地区(1-3)や会所宮遺跡(7)があり、特に後者の弥生時代中期前半代の集落は沖積地に立地する数少ない例のひとつとされる。会所宮遺跡の南を限る標高約170mの丘陵、通称「会所山」には弥生時代後期の土器片が採取される会所山遺跡(8)があり、この「会所山」には『豊後国風土記』景行天皇巡幸説話に登場する久津姫伝承が残る。会所山には複数の古墳(9～11)が存在し、さらに会所山から南に小谷を挟んだ丘陵上には、日下部氏の奥津城と伝えられ装飾古墳1基を含む円墳7基からなる国史跡法恩寺山古墳群(13)が存在するなど、この一帯は古墳時代後期の小規模な古墳が集中する地域である。会所山から東へ続く元宮原台地は全体が元宮遺跡(12)として周知されており、平坦な畑地となっている部分で弥生時代～古墳時代の土器が採集される一方、北東の小高い場所では成人用・小児用の甕棺墓や石棺墓・石蓋土坑墓を中心とする弥生時代から古墳時代の大規模な墳墓群が見つかり、当該時期における日田地域の拠点集落の一つと考えられている。

以上のことから、本遺跡のある地域一帯はおおむね弥生時代～古代に栄えた地域といえ、古代鞆編郷のなかでも中心的な場所のひとつであったといえる。

(註1) 若杉竜太編『日田条里飛矢地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第40集 日田市教育委員会 2003

《参考文献》『日田市史』日田市 1990 ほかに日田市教育委員会発行の関係遺跡報告書など



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ 調査の内容

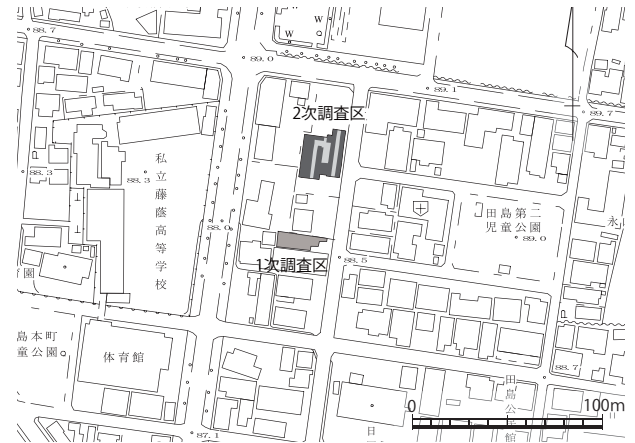
(1) 調査の概要 (第3～5図)

調査対象地は、昭和期以降周辺が官公庁街や住宅地として開発されていく中で水田のまま残されてきた場所である。埋立造成を免れている調査対象地は水田面の標高が約 88 m と、周辺の道路や建物に比べて 0.5 ～ 1 m 低い状態で、これがこのあたりの本来の標高と考えられる。

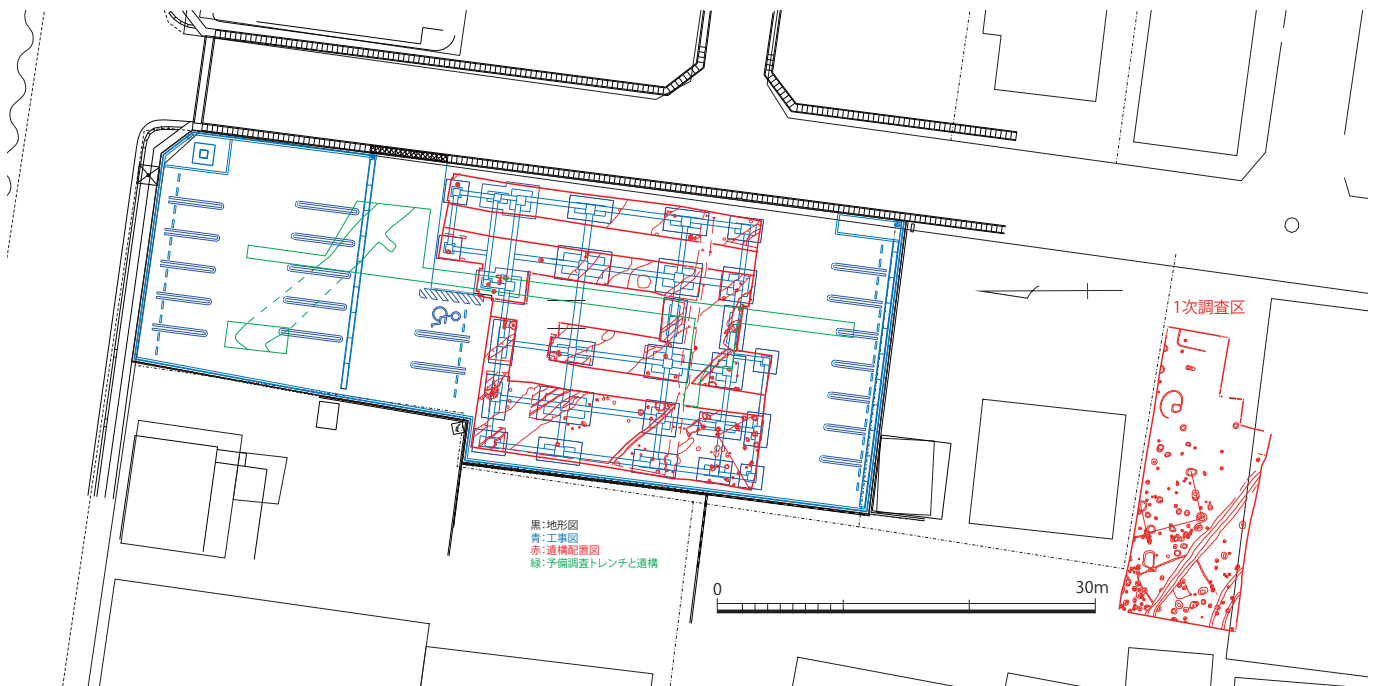
調査は店舗建物の独立基礎を原則南北方向につなげるように 1～4 区のトレンチを設定してトレンチ内の遺構確認を行い、そのなかでも独立基礎で遺構面が損傷する部分について 1～29 のグリッドを設定して、各グリッド内で検出された遺構の掘り下げを行った。そのため、特に溝について調査区のなかでも未調査のままの部分が残されていることに留意しなければならない。

現水田耕作土より下位の基本土層は第 5 図のとおりである。現水田の基盤土 (1・2 層) が 10～20 cm あり、その下に旧表土または旧耕作土と思われる黒褐色粘質土 (3 層) が部分的に見られる。2・3 層の下は灰褐色粘質土 (4 層) が 10 cm 程度堆積しており、その下位の粒子が細かく固くしまった灰褐色粘質土 (5 層) および粘性のある黄褐色砂質土 (6 層) が地山である。遺構埋土は暗褐色から暗灰褐色を呈する粘質土である。この暗褐色系の土は基本土層 A - B (第 5 図左) では部分的に見られ、基本土層 C - D (同図右) ではこの土を埋土とする 1 号溝の直上に現水田盤がつくられていることから、調査地一帯は水田化の際にこの層付近まで大きく削平を受けたものと考えられる。

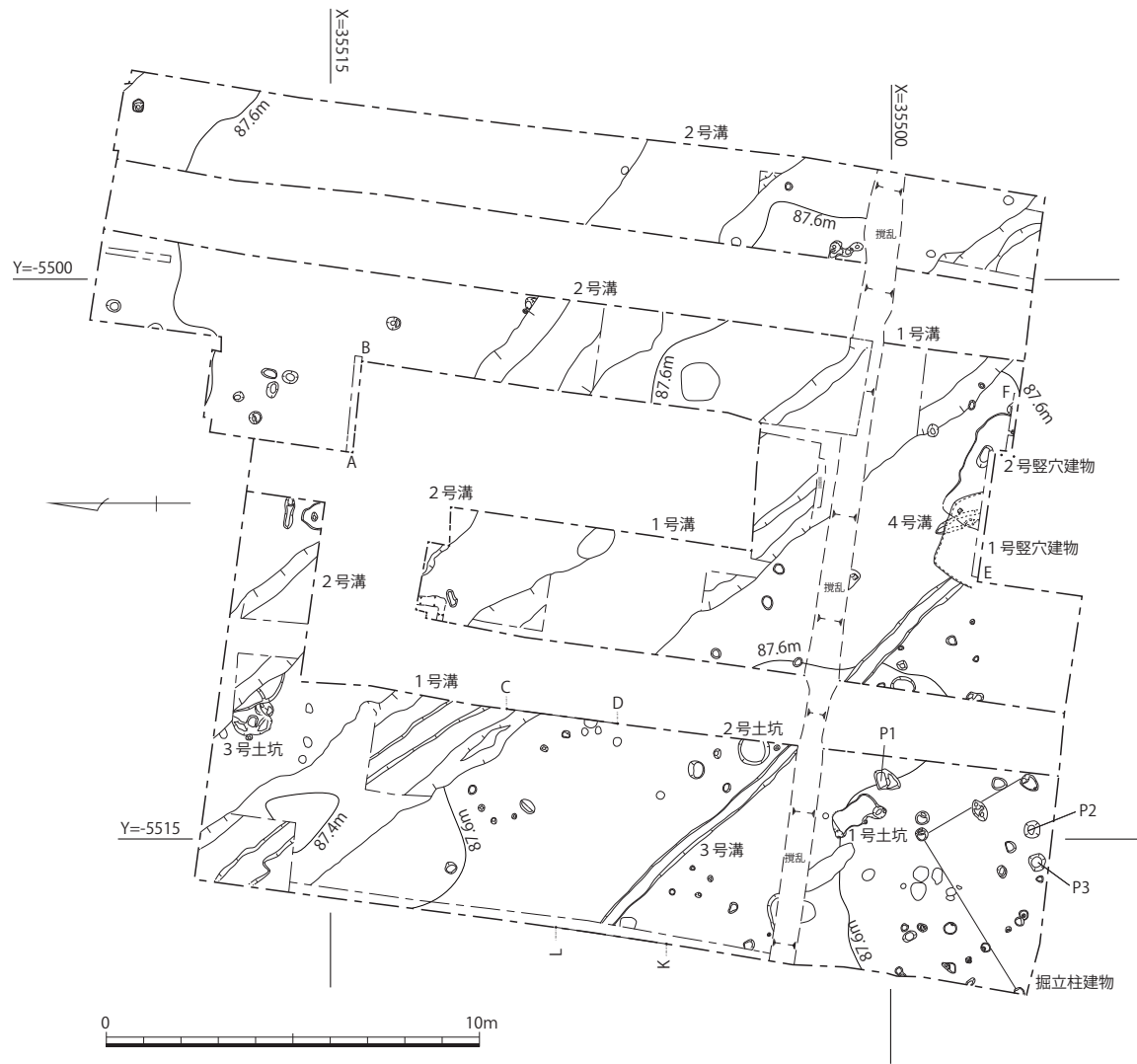
今回の調査で確認された主な遺構は、竪穴建物 2 軒、掘立柱建物 1 棟、溝 4 条、土坑 3 基である。以下、これらの遺構および出土遺物の説明を行う。



第 2 図 調査区位置図 (1/4,000)



第 3 図 周辺地形図 (1/600)



第4図 遺構配置図 (1/200)

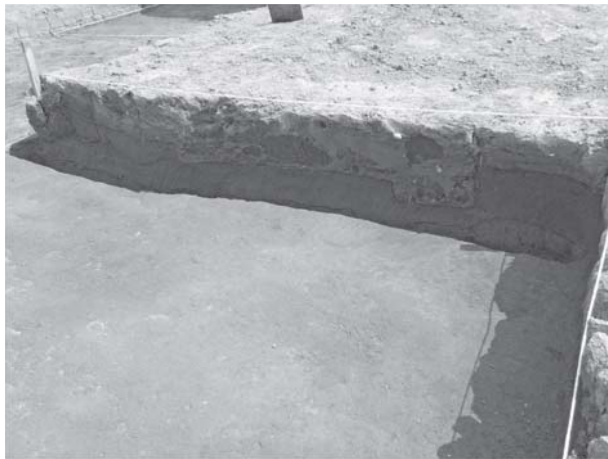
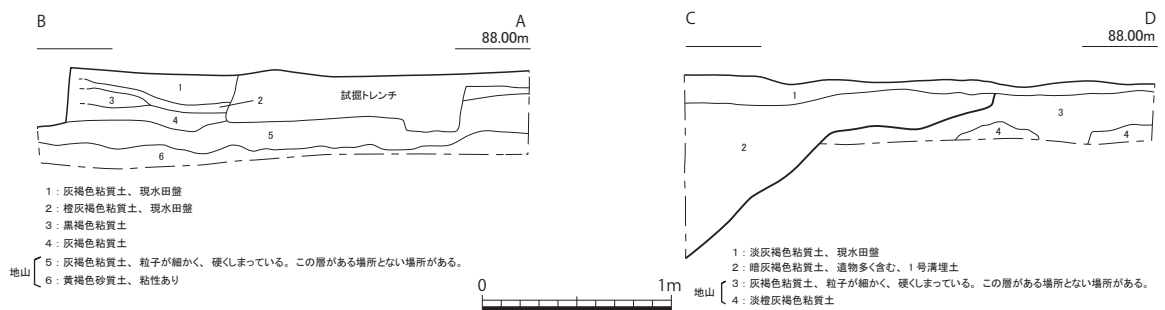


写真3 基本土層



写真4 基本土層



第5図 基本土層図 (1/40)

(2) 遺構と遺物 (第6～15図)

1. 竪穴建物

調査区南端で2軒が切りあって検出された。

1号竪穴建物 (第6図、図版2)

平面不整形を呈すると思われる竪穴建物で、2号竪穴建物と3・4号溝を切り、南半は調査区外にかかる。調査区内での検出規模は、東西約1.6m、南北約1.2m、検出面から床面までの深さは表土除去時に掘り下げすぎたため約5cmしか確認できなかったが、調査区壁面の土層観察により、本来の検出面は15cm以上高かったと思われる。支柱穴や壁周溝は検出されなかった。調査区の壁面より、土師器甕や須恵器の底部が出土している。

出土遺物 (第7図、図版4)

1は土師器甕である。内面にススが付着している。2は須恵器の壺と思われる土器の底部片である。外面にヘラ記号が施されている。

2号竪穴建物 (第6図、図版2)

平面不整形を呈すると思われる竪穴建物で、4号溝を切り、1号竪穴建物に切られる。なお遺構検出面および床面では確認できなかったが、調査区壁面の土層観察では、東端の一部は土坑またはピットにより切られているようである。南半は調査区外にかかる。調査区内での検出規模は、東西約2.7m (調査区断面土層から推定すると約3.1m)、南北約1.1m、検出面から床面までの深さは表土除去時に掘り下げすぎたため約10cmしか確認できなかったが、調査区壁面の土層観察により、本来の検出面は25cm以上高かったと思われる。支柱穴や壁周溝は検出されなかった。埋土中より、弥生土器甕や土師器甕、石製紡錘車などが出土している。

出土遺物 (第7図、図版4)

3・4は弥生土器甕である。ともに体部外面に黒斑がみられる。5は土師器甕である。6は石製紡錘車である。材質は滑石である。なお7は1・2号竪穴建物の埋土中より出土した土師器高坏である。

2. 掘立柱建物 (第8図、図版3)

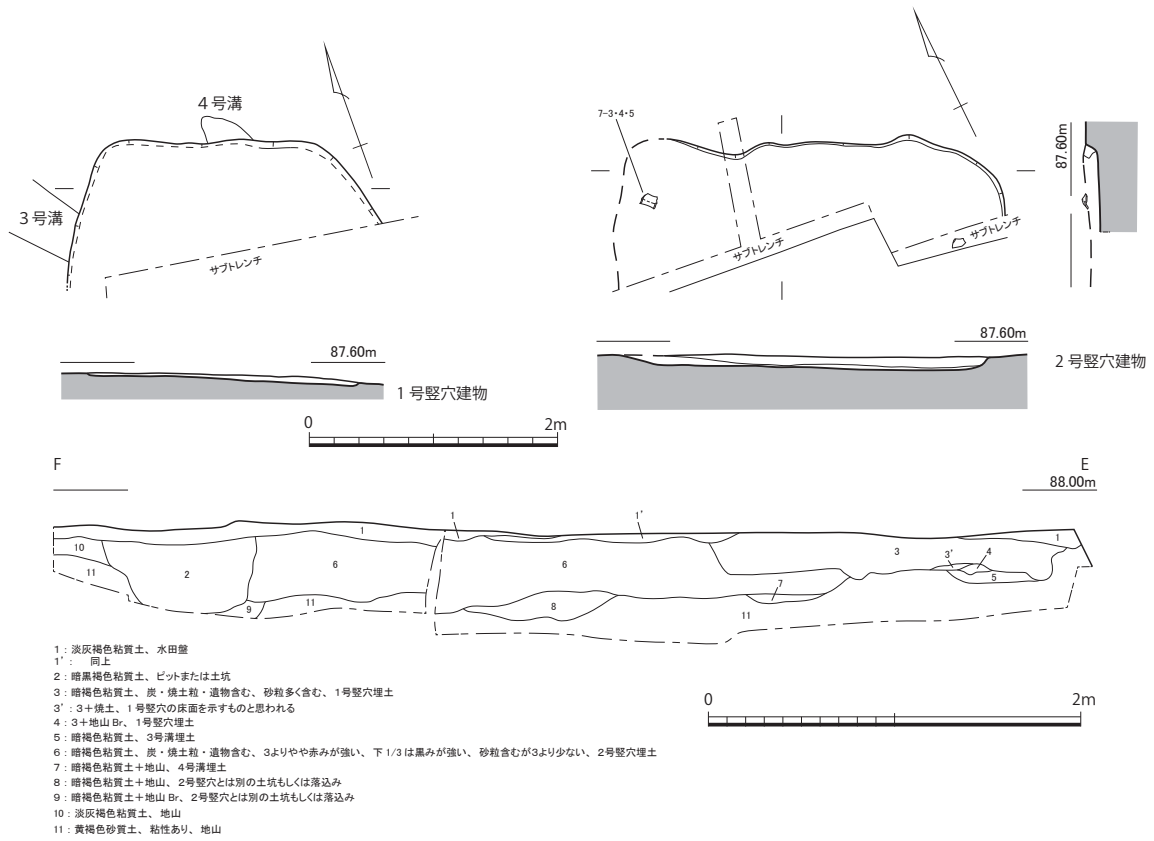
調査区南西端で検出され、他の遺構と切り合わず単独で存在しており、調査区外に展開する。主軸方向をN63°Eにとり、柱間は3間+ α ×2間+ α の側柱建物である。調査区内での規模は柱穴間の心心距離で約5.1m×約3.2m、検出面での柱穴の掘り方直径は約25～60cm、深さ約20～30cmを測る。東側の列の柱穴底面には2つの掘り込みが見られ、建て替えが行われた可能性がある。柱穴からの遺物の出土はなかった。

3. 溝

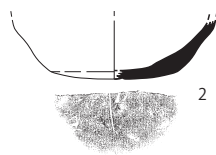
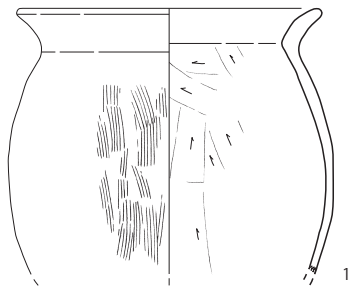
調査区内を南東から北西に横切るように並行する3条と、1・2号竪穴建物に切られて1条が検出された。

1号溝 (第9図、図版3)

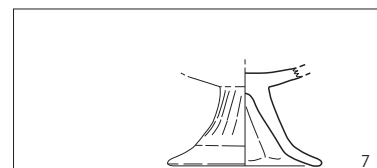
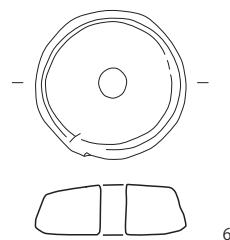
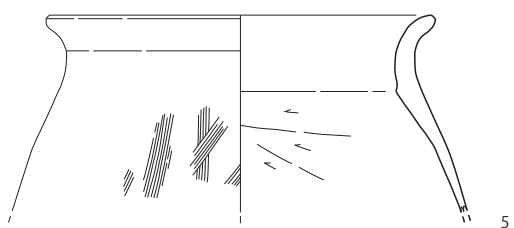
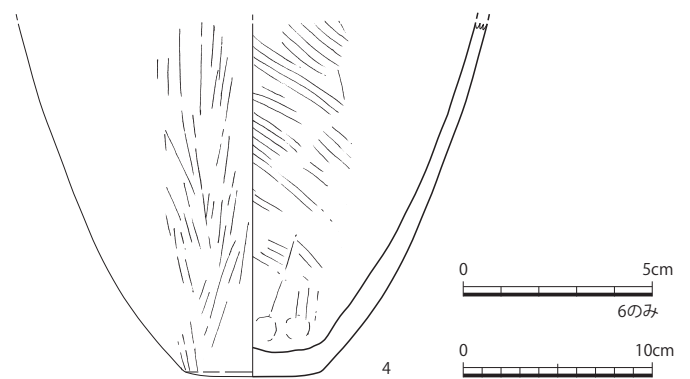
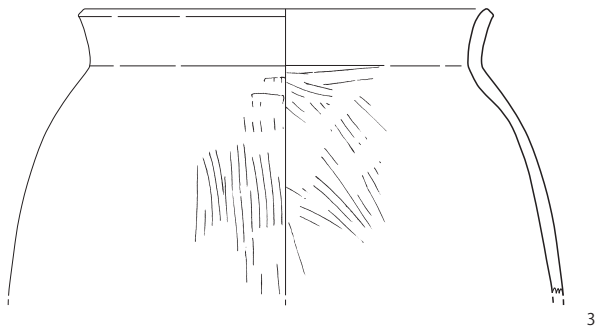
調査区の中央を南東隅から北東隅に向かって横断する溝で、両端は調査区外へ続く。調査区内での検出規模は、長さ約29m、最大幅約2.8m、掘り下げを行った部分の深さは最大で約0.7mを測る。断面は幅広のU字形を呈し、底面幅は約2.2mを測る。溝の埋土はほとんどが灰色系の粘質土であるが、最下層(15層)は小礫を含むやや粗い青灰色砂礫層であることから、当初はかなりの水が流れていたものと思われる。9～14層にかけては水流がゆるやかになりつつ次第に埋没したが、8層には砂層が見られることから、再度水流が回復したものと推測される。その後は水流がゆるやかになりつつ自然に埋没し、最終的に1層において掘り直しと埋め戻しが行われたことが看取できる。遺物は平面的には全体から出土しているが、なかでも第9図1号溝の③とその周辺の未掘箇所集中しており、またほとんどが検出面付近または1層中より出土し、底面付近や2層以下から



第6図 1・2号竪穴建物および竪穴建物周辺土層実測図 (1/60、土層は 1/40)



- 1・2 1号竪穴建物
 3～6 2号竪穴建物
 7 1・2号竪穴建物



第7図 1・2号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

の出土はなかった。遺物が1層のみに集中し、それより下位の層からは遺物の出土がないこと、また出土位置が③周辺に集中していることから、1層はかなり特異な状況を示していると考えられる。また、遺物が弥生時代から中世までと多岐にわたっていることも併せて考えると、遺物そのものの時期が必ずしも埋没過程の最終段階を示すものではない可能性を示唆していると考えられる。

出土遺物（第10・11図、図版4）

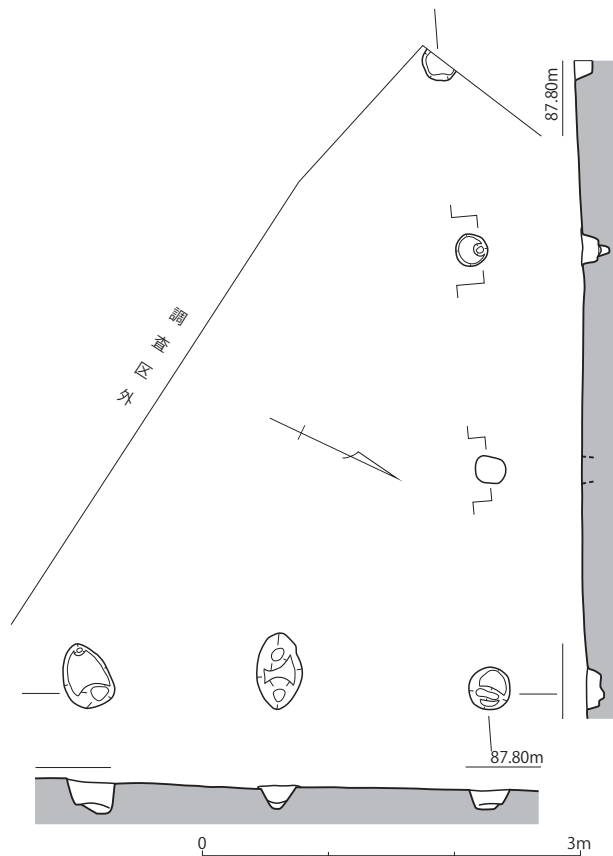
1～11は弥生土器甕の口縁から頸部・体部である。9の口縁端部には赤色顔料と思われるものが付着している。また体部外面には黒斑がみられる。12～16は弥生土器甕の体部～底部である。12の体部外面には黒斑がみられる。17・18は弥生土器甕の底部である。18の体部外面には黒斑がみられる。19は弥生土器甕または壺の底部である。20は弥生土器複合口縁壺の口縁から頸部である。頸部と体部の境に貼付突帯が一部残存している。21は弥生土器複合口縁壺の頸部か。頸部と体部の境に貼付突帯がある。22は弥生土器鉢の口縁片である。23・24は弥生土器高坏の口縁部である。口縁端部が内側に強く湾曲する。25は弥生土器高坏の頸部である。26は土師器高坏の脚部である。スカート状にやや内湾しながら広がる。27は弥生土器器台である。28は土師器の坑または鉢の口縁部と思われる。外面にタタキ、内面に指オサエの痕跡が顕著に残り、粗いつくりである。29は支脚と思われる弥生土器の脚部である。30は土師質土器小皿である。全体に薄いつくりで、外部底面には糸切り痕が残る。31は黒曜石の二次加工剥片である。

2号溝（第9図、図版3）

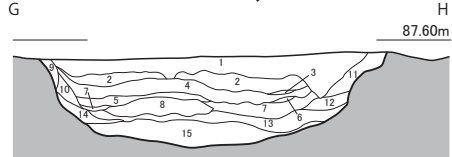
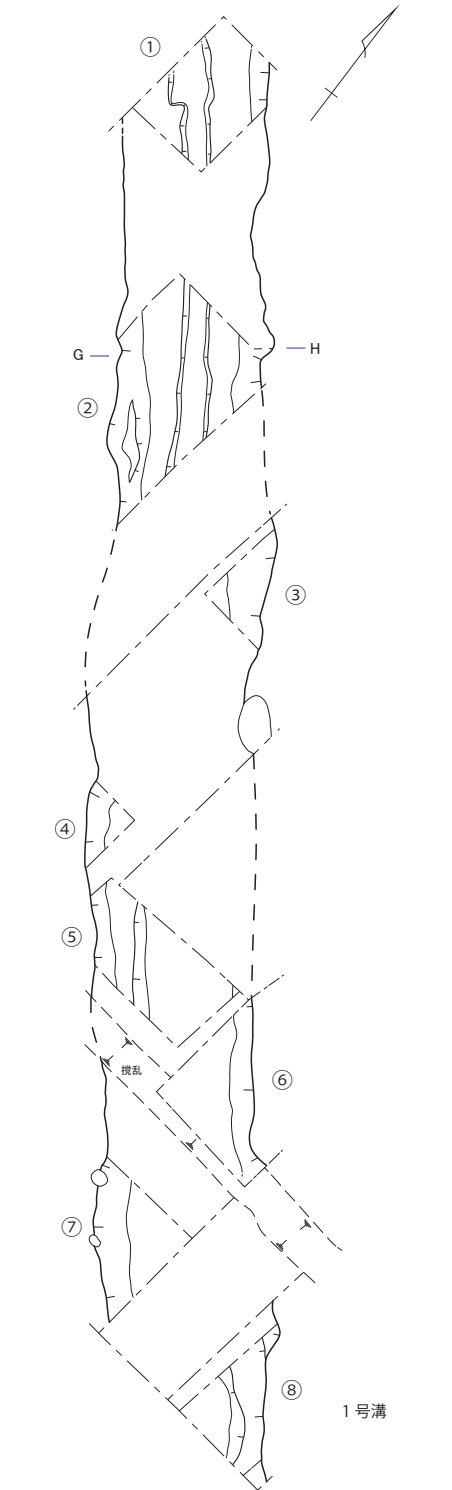
1号溝の東側に並行する溝で、両端は調査区外へ続く。3号土坑を切る。調査区内での検出規模は、長さ約22.2m、最大幅約2.5m、掘り下げを行った部分の深さは最大で1.3mを測る。断面は深い逆台形を呈し、底面の幅は約0.9mである。土層観察により、溝の埋土はA（1・2層）、B（3～11層）、C（12層）、D（13層）の4つに分けることができそうである。最下層D（13層）は小礫を含む粗い砂礫層であり、この溝が掘られた当初は水流がかなりあったものと思われる。その上のC（12層）はかなり厚く堆積した灰色粘質土で、層中に植物遺存体を含んでいることから、何らかの理由により一気に埋まったと考えられる。B（3～11層）では9層に砂が含まれていることから水の流れたと思われるが、その後は自然に埋没していき、ある段階で掘り直しが行われて短期間のうちに埋まった、若しくは人為的に埋められた（A：1・2層）と想定することができる。なお、A・Bの層の在り方は、断面の形状や埋没過程が1号溝と類似していることを指摘しておく。遺物は1層および検出面付近から多く出土し、B以下からはほとんど出土しなかったことから、1号溝と同様にA（1・2層）の特異な状況が看取できる。

出土遺物（第12図、図版5）

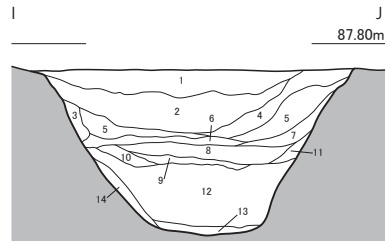
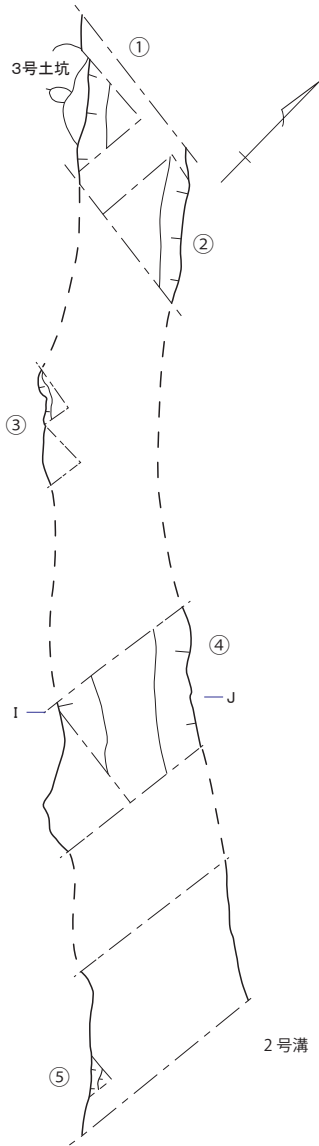
1～8は土師器甕の口縁部である。7は口縁内部にススが付着している。9～17は土師器皿である。いずれも口縁が短く上方に立ちあがり、内湾または内傾するものもある。16は口縁端部外面に黒斑がみられる。18～24は土師器坏である。口縁端部がゆるやかに上方に立ちあがり、やや内湾するものもみられる。25・26は高台のある土師器坏の底



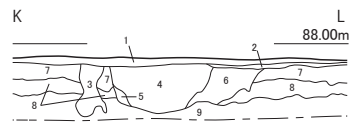
第8図 掘立柱建物実測図（1/60）



- 1: 暗灰褐色粘質土、遺物を多く含む
 - 2: 淡灰褐色粘質土
 - 3: 淡灰褐色粘質土
 - 4: 淡灰褐色粘質土 Br+黒灰褐色粘質土 Br
 - 5: 白灰褐色粘質土+淡灰褐色粘質土 Br
 - 6: 淡灰褐色粘質土
 - 7: 白灰褐色粘質土
 - 8: 淡灰褐色砂層、やや細かい砂
 - 9: 地山+暗灰褐色粘質土
 - 10: 暗灰褐色粘質土+地山 Br
 - 11: 暗灰褐色粘質土+地山 Br
 - 12: 灰褐色粘質土
 - 13: 白灰褐色粘質土
 - 14: 黒灰褐色粘質土
 - 15: 青灰色砂礫層、5cm程度の小礫を含む、やや粗い砂
- 地山: 橙白灰褐色粘土、下のほうは砂っぽくなる



- A 1: 灰茶褐色粘質土、遺物多く含む、黄橙色粒含む
 - 2: 灰褐色粘質土、遺物・黄橙色粒・小礫含む
 - 3: 2+地山 Br
 - 4: 灰茶褐色粘質土、やや砂混、遺物・黄褐色粒含む
 - 5: 灰褐色粘質土、2より粘性強い、黄褐色粒・小礫含む
 - 6: 暗灰褐色粘質土
 - 7: 暗灰褐色粘質土
 - B 8: 暗灰褐色粘質土
 - 9: 暗灰褐色粘質土+白灰色 Br+砂
 - 10: 暗灰褐色粘質土+灰茶褐色粘質土 Br
 - 11: 暗灰褐色粘質土+地山 Br
 - C 12: 灰色粘質土、白灰色粘質土粒・Br混、下のほうはやや砂混、植物遺存体含む
 - D 13: 淡灰褐色砂礫層、粗砂、小礫含む
 - 14: 地山+灰褐色 Br
- 地山: 12より上のほうは上部は橙白灰色粘質土、下部は橙白灰色粘質土、さらに13より下では青灰色砂礫層の互層も見られる



- 1: 灰褐色粘質土、現水田盤
- 2: 橙灰褐色粘質土、現水田盤
- 3: 4+6+地山ブロック、程度もしくは擾乱
- 4: 暗黒褐色粘質土、ビットもしくは土坑
- 5: 4+地山ブロック、崩落土か
- 6: 暗褐色粘質土、地山ブロック少々混、3号溝埋土
- 7: 淡灰褐色粘質土
- 8: 7と9の層移層
- 9: 黄褐色砂質土、粘性あり

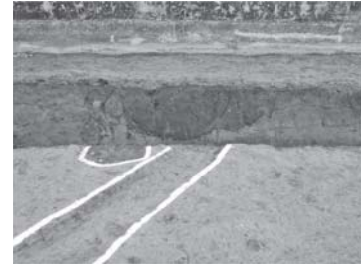
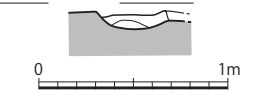
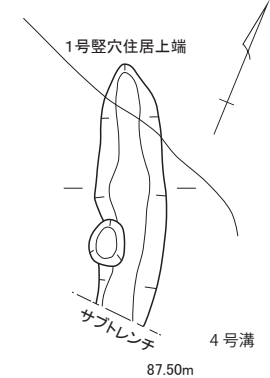
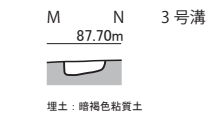
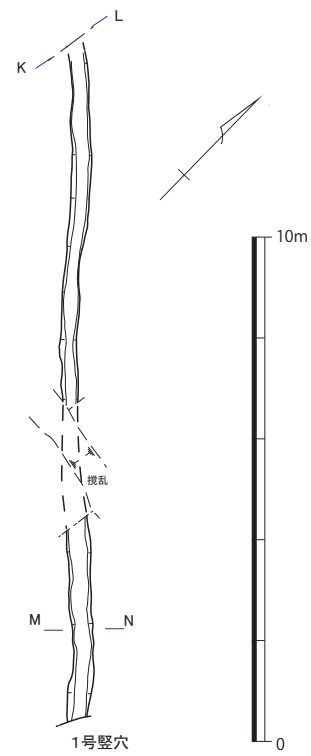
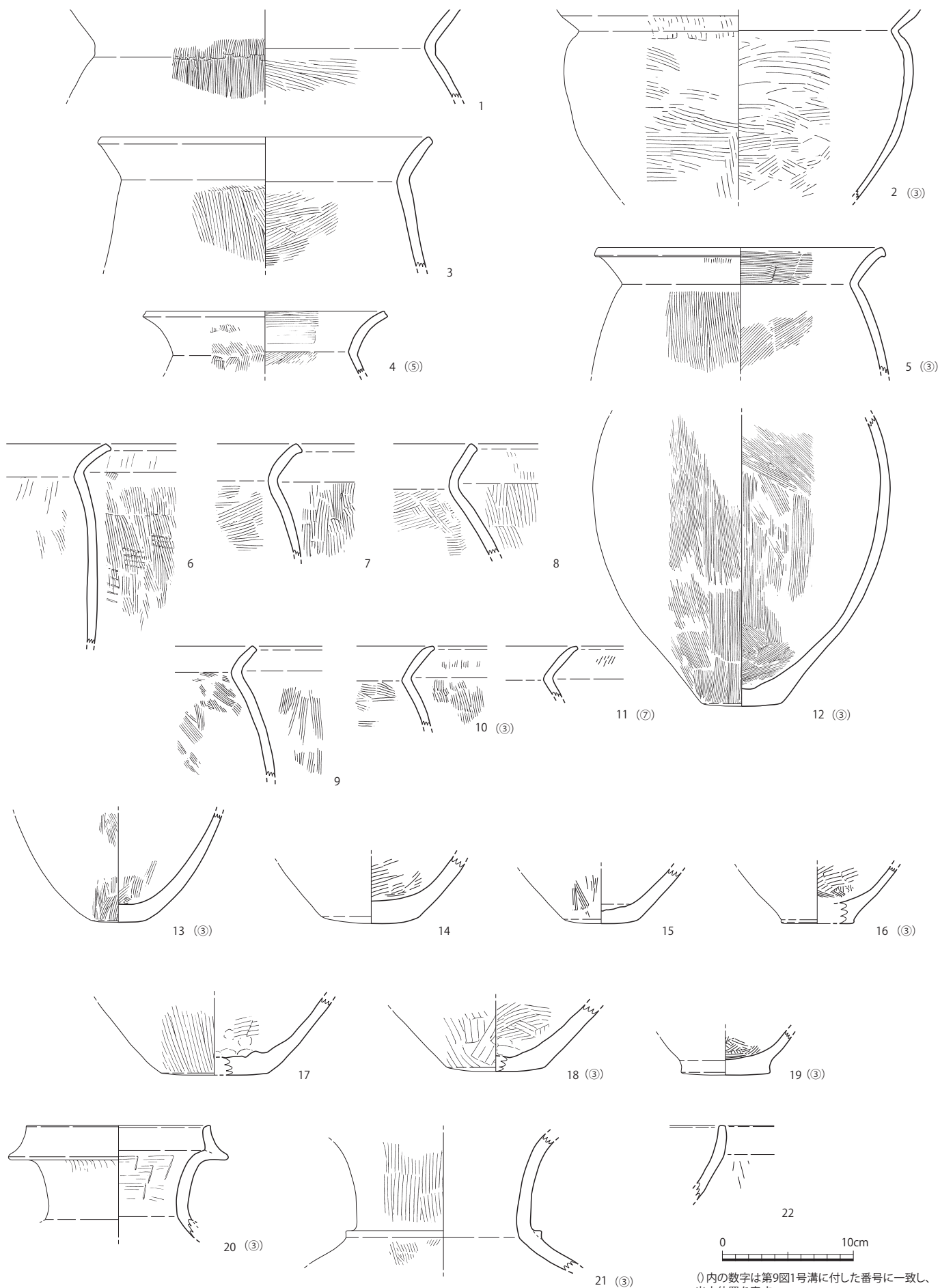


写真5 3号溝西端土層



第9図 1~4号溝実測図 (1/150、土層 1/60、4号溝は平面・土層とも 1/40)



①内の数字は第9図1号溝に付した番号に一致し、
 出土位置を表す。
 番号の記載のないものは1号溝一括遺物

第10図 1号溝出土遺物実測図① (1/4)

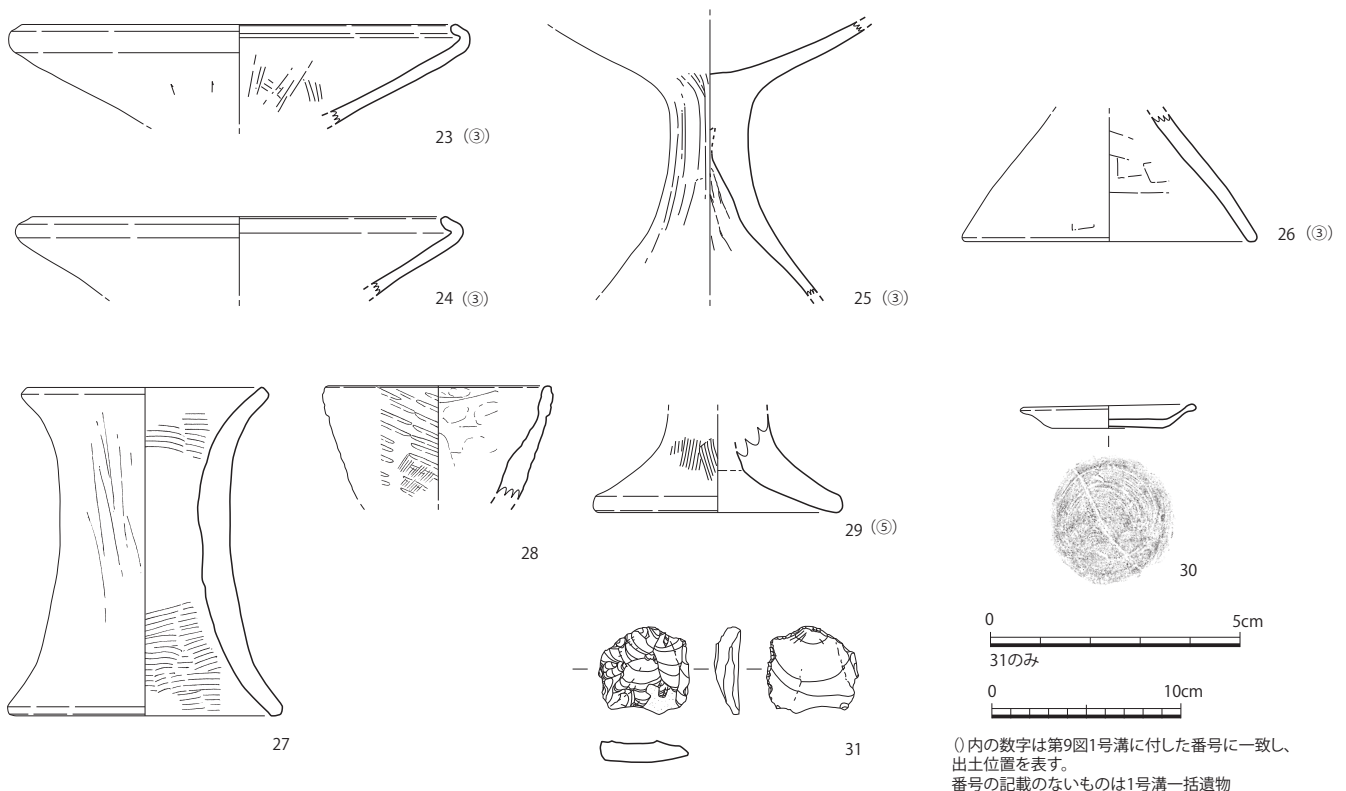
部片である。25は坯の底部端から直立気味に高台が付けられている。26は坯の底部端からやや外に開き気味の
高台となっている。27は土師質土器坯である。底部は回転ヘラ切り離しとなっている。28は須恵器壺の口縁か
ら頸部である。赤焼須恵器で、外面口縁端にハケ目、体部にはタタキ痕および青海波状の当て具痕が顕著に残
る。29は須恵器高坯の坯部である。脚部との接合面で破損している。30は須恵器坏蓋である。ボタン状のつま
みがあり、端部は嘴状に曲がる。31・32は須恵器坏身である。31は受け部の端部がわずかに口縁端よりも高
い。32は口縁が底部から緩やかに内湾しながら立ちあがり、端部はやや外反する。33は須恵器坏身と思われる
口縁片である。32より強く端部が外反する。34～38は高台を持つ須恵器坏身である。34・37・38は底部と
体部の境よりやや内側に高台が貼付されており、34は内湾気味の高台、37・38は外に開く高台となっている。
35・36は底部と体部の境がはっきりしない坯に、強く外に開く高台が貼付されている。

3号溝（第9図、図版2・3）

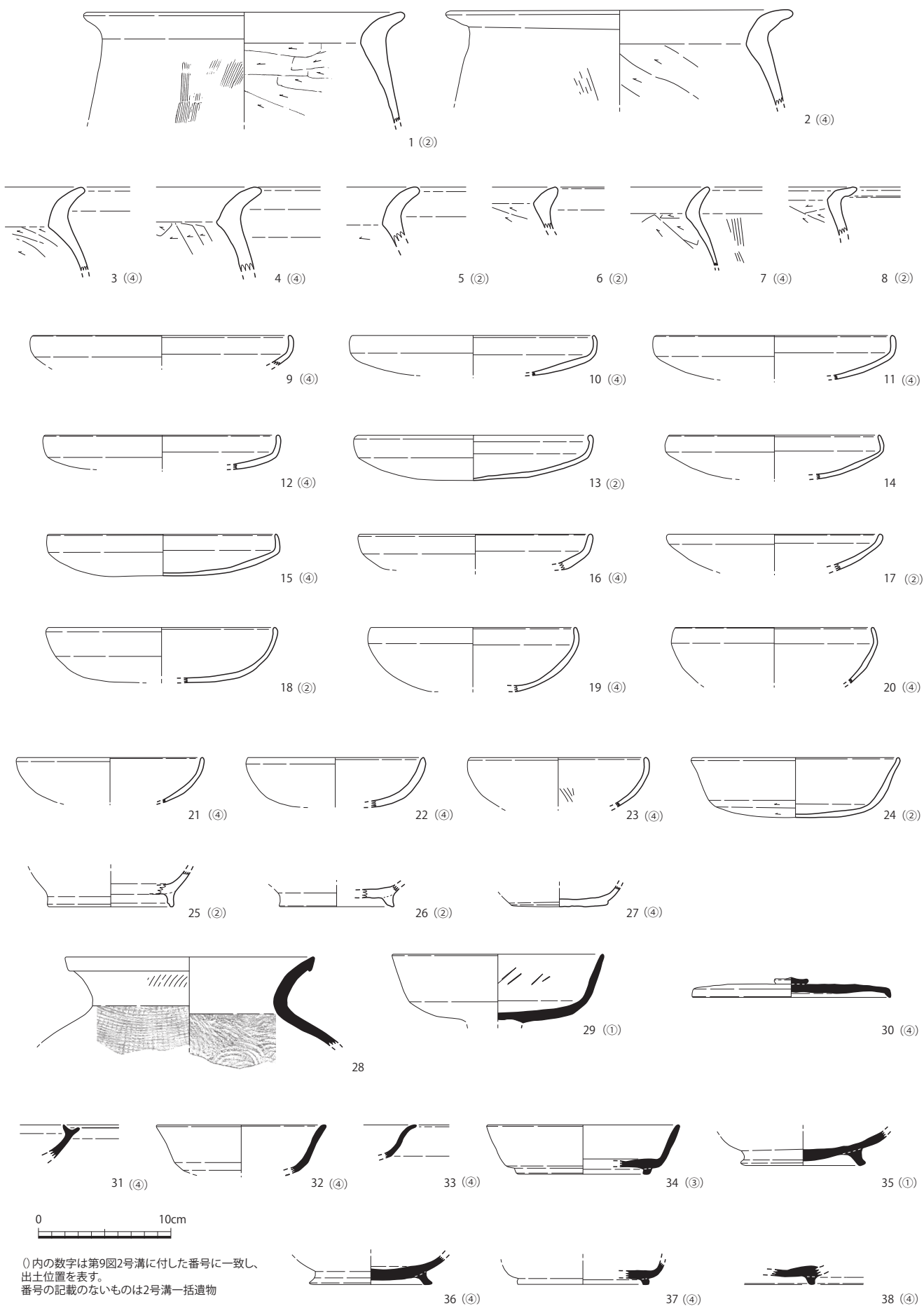
1号溝の西側で、1・2号溝とほぼ並行して検出された。両端は調査区外へ続く。調査区内での検出規模は、
長さ約13.7m、検出面の最大幅約0.4m、深さは最大で約10cmを測る。表土除去時に掘り下げすぎたため1・
2号溝に比べてかなり規模が小さくなっているが、調査区壁面の土層観察により、本来は幅約0.7m以上、深さ
約30cm以上あったものと思われる。埋土中から土器の小破片が1点出土しているが、図示できなかった。

4号溝（第9図、図版2）

1号溝と3号溝の間で検出され、そのほとんどは1・2号竪穴建物で切られているため、平面的に確認できる
のは北端のわずかな一部で、調査区壁面の土層観察によりかろうじて溝であることを知ることができるのみであ
る。南側は調査区外へ続く。調査区内での検出規模は、長さ約6.5m、最大幅約0.4m、深さは最大で約10cm
である。この遺構からの遺物の出土はなかった。



第11図 1号溝出土遺物実測図② (1/4・2/3)



第12図 2号溝出土遺物実測図 (1/4)

4. 土坑

土坑状の遺構は調査区全体でいくつか見られるが、調査の方針上掘り下げていないものがある。ここでは掘り下げを行った土坑3基について説明する。

1号土坑（第13図、図版3）

調査区南西、掘立柱建物と3号溝の間で検出された遺構である。平面不整形を呈し、長軸約1.5m、短軸約0.8m、底面までの深さは約20cmを測る。長軸側の両端の一部にそれぞれ1つずつピット状の掘り込みが見られ最大で深さ約45cmである。この遺構からは土師質土器香炉片が出土している。

出土遺物（第13図、図版5）

1は土師質土器香炉と思われる脚部片である。小片のため詳細は不明である。

2号土坑（第13図、図版3）

調査区南西、3号溝の北側で検出された遺構である。平面はやや歪な円形を呈し、直径約0.85m、底面はほぼ平らで深さは約10cmを測る。この遺構からは土器の小片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

3号土坑（第13図）

調査区北西、1・2号溝の間で検出され、2号溝とピットに切られる。平面不整形を呈し、検出面での規模は南北約1.05m、東西約0.7mを測る。底面には複数の段が見られ、もっとも深い部分で20cmを測る。この遺構からは遺物の出土はなかった。

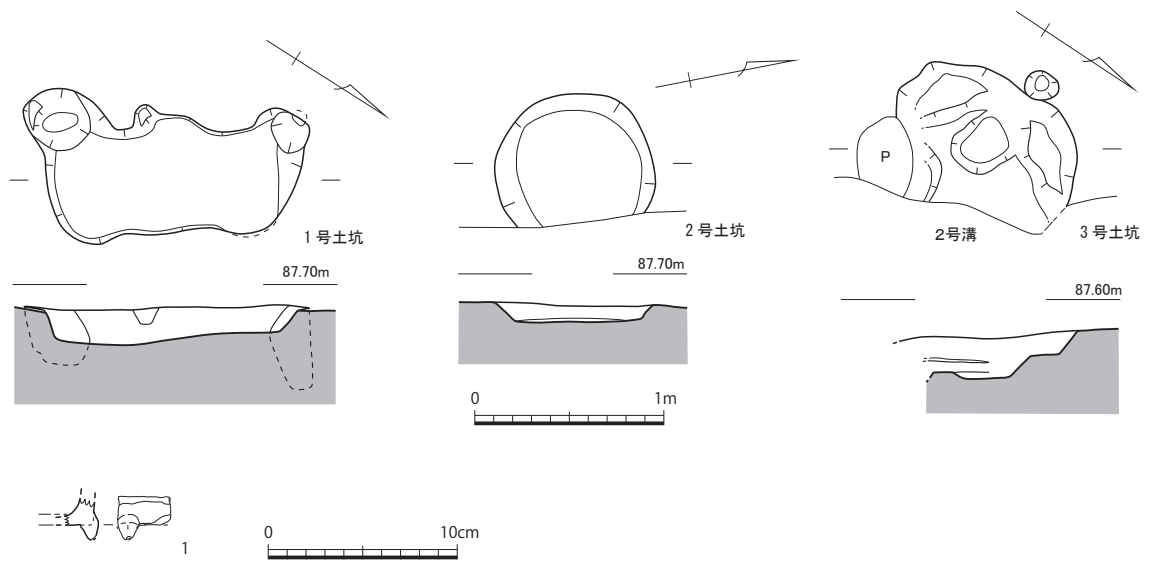
5. その他の遺物（第14図、図版5）

前節までに記述してきた遺構に伴う遺物のほかにも、ピットや表土中などから遺物が出土している。

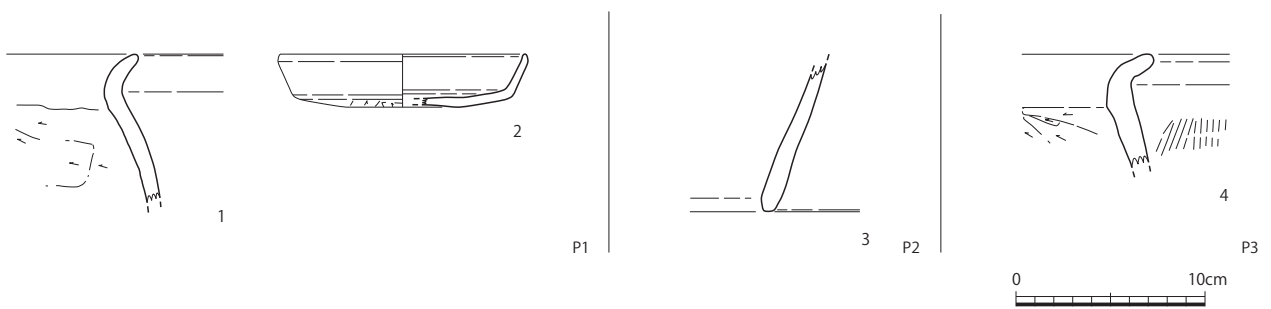
遺物が出土したピット（P1～3）は3号溝の南西、掘立柱建物周辺に集中しており、調査区全体を見ても、その他のピットを含め、3号溝または1号溝の南西側に集中している。

第14図はピットからの出土遺物である。1・2はP1出土の土師器の甕と坏である。1は口縁片、2は1/2程度の残存である。2の外部底面はケズリによって仕上げられている。3はP2出土の土師器甕の端部片である。4はP3出土の土師器甕である。口縁片で、外面には粗いハケメが残る。

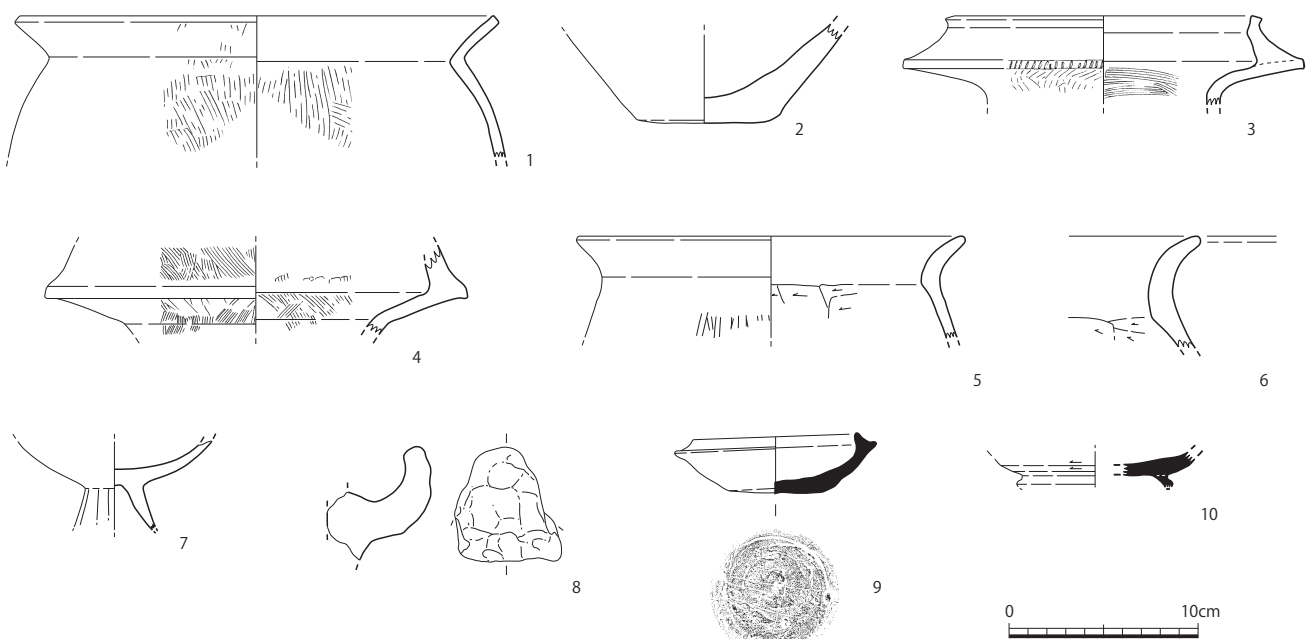
第15図は遺構検出時などに出土した一括遺物である。1・2は弥生土器甕である。2の内部には指オサエの痕跡が見られる。3・4は弥生土器壺で、複合口縁壺の口縁部および頸部である。3は複合口縁の接合部に刻み目が施されている。4は口縁端部を欠く。5・6は土師器甕である。ともに口縁片である。7は土師器高坏の頸部片である。口縁を欠くが、割れ口は接合面となっている。8は土師器甕の把手である。指オサエとナデにより成形されている。9・10は須恵器坏である。9は小型の坏身で、受け部径10.6cm、外面底部にはヘラ記号が施されている。10は高台のある坏の底部片である。



第13図 1～3号土坑・1号土坑出土遺物実測図 (1/40・1/4)



第14図 ピット出土遺物実測図 (1/4)



第15図 その他の出土遺物実測図 (1/4)

IV 総括

今回の調査では、竪穴建物 2 軒、掘立柱建物 1 棟、溝 4 条、土坑 3 基が確認された。まずは出土遺物などから、各遺構の時期を考察してみる。

1 号竪穴建物からは須恵器壺と思われる底部片と土師器甕が、2 号竪穴建物からは弥生土器および土師器甕が出土している。2 号竪穴建物から出土した土師器甕（第 7 図 5）は同図 3・4 の弥生土器甕と同じ場所から出土したものであり、この土師器甕がこの竪穴建物の時期を示すと考えられるので、古墳時代後期としておく。1 号竪穴建物も出土須恵器から古墳時代後期と考えられる。調査区壁面土層の観察から、竪穴建物の順番は（古）2 号→（新）1 号であることが明白であるが、これらにはさほど時期差がないものと考えられる。これら竪穴建物と切り合いのある 3・4 号溝については、今回の調査範囲内では先後関係を把握することができないが、調査区壁面土層の観察により 1・2 号竪穴建物より古いものと考えられ、古墳時代後期以前となる。以上のことから、竪穴建物周辺の遺構の順番は、古いほうから 3・4 号溝→2 号竪穴建物→1 号竪穴建物ととらえることができる。

次に、1 号溝の遺物は、土層の 1 層から出土したものが殆どで、古墳時代の土師器や中世の土師質土器を若干含むものの、大半は弥生土器である。第 10 図 21 の壺は後迫遺跡 4 号竪穴建物出土のものに類似し、後期 4 期（後期後半）と考えられる。また第 11 図 23・24 の高坏は小西遺跡 14 号竪穴建物出土のものに類似し、後期 3～4 期（中期中頃から後半）と位置付けることができる。その他の遺物もこれらの時期から大きく逸脱するものは見られないことから、1 号溝の出土遺物の時期は弥生時代後期中頃から後半を中心とし、一部古墳時代初頭および中世のものを含むととらえられる。一方の 2 号溝の出土遺物は 1・2 層から出土し、土師質土器や図示できない程度の弥生土器片を若干含むものの、大半は土師器と須恵器で占められている。第 12 図 28 の須恵器甕や 29 の須恵器高坏および 31 の須恵器坏は古墳時代後期のものと考えられるが、それ以外に図示した須恵器は、蓋の膨らみのない天井部と嘴状の端部や底端部近くにハの字あるいは直立する形で貼付されている坏の高台などの特徴から、中村編年 IV 形式 1～2 段階と考えられ、8 世紀前半から中頃を中心とした時期ととらえられるだろう。ただし土師器甕や坏は少し古い様相も見られるので、2 号溝の遺物の時期は 7 世紀後半から 8 世紀前半を中心とするものと大きくとらえておく。そのほか、掘立柱建物は柱穴からの遺物の出土はないが、建物の方向が 1～3 号溝と平行していることから、弥生時代から 8 世紀に絞ることができそうであるが、1 次調査の例から 8 世紀頃と考えたい。また土坑については、他遺構との切り合いや出土遺物のない 2 号土坑は時期不明とせざるを得ないが、1 号土坑は出土した土師質土器の香炉脚部？片から大まかに中世、3 号土坑は出土遺物はないが 2 号溝に切られることから 8 世紀前半以前と位置付けておきたい。

以上、各遺構の出土遺物の時期について考察してきたが、殆どの遺構の所属時期は出土遺物の時代と齟齬はないものの、1・2 号溝に関しては、遺物の出土状況に特異な点が見られるため遺物の時期が必ずしも埋没過程の最終段階を示すものではない可能性を指摘した（7 頁）。そこで、遺物の時期検討を踏まえ、1・2 号溝の実際の時期や性格について、周辺での調査例を交えながら考えてみる。

先述のとおり、1・2 号溝からの出土遺物そのものの時期は、1 号溝が弥生時代後期・古墳時代初頭・中世の 3 時期が見られるのに対し、2 号溝では古墳時代後期・古代（7 世紀後半から 8 世紀前半）の 2 時期を中心としており、時期の違いが見られる。また、溝の断面の形状も、1 号溝は幅広い U 字形、2 号溝は深い逆台形と異なっている。しかし 1・2 号溝の遺構配置を見ると、調査区の南東から北西に向かってほぼ並行しており、地形の制約を考慮しても、一方の存在を全く知らずにもう一方が掘られたとは考え難い。また、ともに遺物は上層のみからの出土で、それ以下の層には遺物が含まれないこと、しかも出土位置が特定の場所に集中していることが共通点として挙げられ、1・2 号溝の土層堆積状況は非常に類似していることが指摘できる。なかでも 1 号溝と 2 号溝 B（3～11 層）は、堆積状況のみならず断面の形状や深さもほぼ同じである。この 2 つの溝が同時期のもの

と仮定して、それぞれの埋没時期を対応させると、2号溝C（12層）・D（13・14層）はこれらより少し古いものと考えられ、①2号溝C・D→②1号溝2層以下と2号溝B→③1号溝1層と2号溝1・2層という埋没過程が想定される。この場合のそれぞれの時期は、③の埋没の最終段階については、多くの弥生土器や須恵器が出土しているものの、最も新しい遺物である1号溝の土師質土器（第11図30）を所属の下限と考える。この土師質土器は、底部糸切りであること、また口縁端部を丸くおさめわずかに外反させる特徴が古代後Ⅲ期（10世紀後半から11世紀前半）の後半から中世Ⅰ期（11世紀中頃から12世紀前半）の前半に見られる塚の口縁に類似することから概ね11世紀と考えられ、11世紀またはそれ以降と想定する。1号土坑から土師質土器片が出土しており、また予備調査や1次調査でも中世の遺物が確認されていることから、周辺に同時期の集落が存在した可能性が考えられる。1・2号溝から出土した弥生から古代の遺物については、殆どが上層の一部に集中して出土したという状況から、その年代が埋没時期を示すのではなく、中世の人々が周辺に元々存在していた各時期の遺構埋土を掘削した際に土の中から出てきた土器などをまとめて廃棄するなどの二次的廃棄の可能性を想定しておきたい。②・①の埋没時期については直接の出土遺物がないことから、中世以前の弥生時代後期後半～古代のいずれかと考えられる。ここで予備調査の成果を見てみると、開発予定地北側では1・2号溝と同等の規模を有する古代と考えられる溝がもう1本並行して存在し、しかも1・2号溝の方向に直角に曲がっている（第3図緑色）ことから、相互に関係する可能性が考えられる。こうしたことなどから、1・2号溝の所属時期は本来は古代のものである可能性が高く、今回の出土遺物からすれば7世紀後半から8世紀前半と考えられよう。なお3号溝も1・2号溝と並行しているが、溝の規模からすれば1次調査1号溝（7世紀前半から中頃）に近く、1・2号溝に先行し1次調査で確認された6～8世紀の集落に属する可能性が考えられる。いずれにしても、これらの溝は周辺調査例と共に考えると、6～8世紀の範疇に収まるものと考えられよう。

1・2号溝の性格については、その規模と、上層以外に遺物を含まないことから、通常の集落遺跡に伴う溝とは考え難い。通常の集落遺跡に伴う溝は、土器などの生活用具が流れ込んで、または廃棄されて堆積する。しかしこの1・2号溝は埋土が上層に至るまで殆ど遺物を含まずに堆積していることから、溝としての機能維持が相当に意識されていたことが想像される。本遺跡の北東約500mにある大波羅遺跡^(註1)では柱木が残ったままの大型柱穴列や庇付建物、瓦や墨書土器が確認されており、奈良時代の公的施設の存在が示唆されている。この一帯では古代の遺跡が確認されることが多く、本遺跡も溝の規模などから公的施設との関連を想定すべきであろう。

《参考文献》遺物の時期の判断にあたっては、以下の報告書・論文等を参考にした。

弥生土器：渡邊隆行編『吹上Ⅵ－自然科学分析調査の記録・調査の総括－』

日田市埋蔵文化財調査報告書第112集（市内遺跡発掘調査報告13）日田市教育委員会 2014

若杉竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集 日田市教育委員会 2002

若杉竜太編『求来里の遺跡Ⅲ－県営経営体育成騎馬整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）－小西遺跡の調査』

日田市埋蔵文化財調査報告書第91集 日田市教育委員会 2010

須恵器：中村 浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房 1981

土師器：大庭孝夫「3. 堂畑遺跡周辺における7世紀後半から8世紀末の土師器の変遷」

『堂畑遺跡Ⅲ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 福岡県教育委員会 2005

土師質土器：山本信夫・山村信榮「[第1部] 中世食器の地域性 10－九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』

国立歴史民俗博物館 1997

（註1）渡邊隆行編『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 2001

今田秀樹編『大波羅遺跡－5次調査の概要－』日田市埋蔵文化財調査報告書第100集 日田市教育委員会 2011

第1表 出土土器観察表①

挿図 番号	遺構名	出土 位置	種別	器種	法 量				調 整		胎土	焼成	色 調				備 考
					口径	胸部径	底径	器高	内面	外面			内面	Hue	外面	Hue	
7-1	1号竪穴		土師器	甕	16.0	17.2	-	(14.0)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい黄褐色	10YR7/3	内面にスス付着
7-2	1号竪穴		須恵器	壺?	-	-	(6.6)	(3.1)	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	B・E	良	褐灰色	10YR5/1	褐灰色	10YR5/1	底部片 外面に黒斑あり
7-3	2号竪穴		弥生土器	甕	(21.4)	-	-	(15.1)	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/2	にぶい黄褐色	10YR7/2	口縁～体部片 外面に黒斑あり
7-4	2号竪穴		弥生土器	甕	-	-	(7.2)	(18.6)	ハケ目・ナデ・指オサエ	工具ナデ・ナデ	A・C・E	良	灰白色	10YR8/2	にぶい黄褐色	10YR7/3	体部～底部片 外面に黒斑あり
7-5	2号竪穴		土師器	甕	(20.2)	-	-	(10.4)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・E	良	浅黄褐色	10YR8/3	浅黄褐色	10YR8/3	
7-7	1号竪穴 2号竪穴		土師器	高環	-	-	(8.2)	(5.2)	指ナデ・摩耗のため不明瞭	工具ナデ・ヨコナデ・摩耗のため不明瞭	A・B	良	にぶい黄褐色	10YR7/2	淡褐色	5YR8/4	
10-1	1号溝		弥生土器	甕	(30.7)	-	-	(7.6)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	灰黄褐色	10YR6/2	褐灰色	10YR5/1	口縁片
10-2	1号溝	③	弥生土器	甕	(27.8)	-	-	(15.3)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目・工具ナデ	A・C・D・E	良	にぶい褐色	7.5YR6/4	にぶい褐色	7.5YR6/4	口縁～体部
10-3	1号溝		弥生土器	甕	(25.0)	-	-	(9.9)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい褐色	7.5YR6/3	口縁片
10-4	1号溝	⑤	弥生土器	甕	(18.0)	-	-	(4.8)	ハケ目	ハケ目・ヨコナデ	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい黄褐色	10YR7/3	口縁片
10-5	1号溝	③	弥生土器	甕	(21.8)	-	-	(9.7)	ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい黄褐色	10YR7/4	
10-6	1号溝		弥生土器	甕	-	-	-	(15.1)	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	ヨコナデ・工具痕・タタキ・ハケ目	A・C・D・E	良	褐色	2.5YR7/6	褐色	2.5YR7/6	
10-7	1号溝		弥生土器	甕	-	-	-	(8.6)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・B・C	良	にぶい黄褐色	10YR6/3	にぶい黄褐色	10YR6/3	口縁片
10-8	1号溝		弥生土器	甕	-	-	-	(8.5)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・B・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR6/4	にぶい黄褐色	10YR6/4	口縁片
10-9	1号溝		弥生土器	甕	-	-	-	(10.0)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい黄褐色	10YR7/3	口縁～体部片 外面に黒斑あり 口縁端部に赤色顔料か?
10-10	1号溝	③	弥生土器	甕	-	-	-	(6.1)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい褐色	7.5YR7/4	褐灰色	7.5YR4/1	口縁片
10-11	1号溝	⑦	弥生土器	甕	-	-	-	(3.9)	ヨコナデ・摩耗のため不明瞭	ヨコナデ・ハケ目・摩耗のため不明瞭	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR5/3	黒褐色	10YR3/1	口縁片
10-12	1号溝	③	弥生土器	甕	-	-	6.0	(22.2)	ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい黄褐色	10YR7/4	
10-13	1号溝	③	弥生土器	甕	-	-	4.0	(8.3)	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	A・B・C・D	良	にぶい黄褐色	10YR7/2	赤褐色	10R6/6	底部片
10-14	1号溝		弥生土器	甕	-	-	7.4	(5.1)	ハケ目・ナデ	ナデ	A・C・E	良	にぶい褐色	7.5YR7/3	にぶい褐色	7.5YR7/3	底部片
10-15	1号溝		弥生土器	甕	-	-	(5.8)	(4.2)	摩耗のため不明瞭	工具ナデ・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/2	にぶい黄褐色	10YR7/2	底部片
10-16	1号溝	③	弥生土器	甕	-	-	(5.6)	(4.3)	ハケ目	ナデ・ヨコナデ	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR6/3	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	底部片
10-17	1号溝		弥生土器	甕?	-	-	(8.2)	(5.9)	ナデ・ハケ目・指オサエ	ハケ目・ナデ	A・C・E	良	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄褐色	10YR7/3	
10-18	1号溝	③	弥生土器	甕?	-	-	(7.4)	(5.4)	ハケ目・指ナデ・指オサエ	ハケ目・ナデ	A・D・E	良	灰黄褐色	10YR5/2	浅黄褐色	10YR8/3	底部片 外面に黒斑あり
10-19	1号溝	③	弥生土器	甕? 壺?	-	-	(6.8)	(3.4)	ハケ目	ナデ	A・C・E	良	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい褐色	5YR7/4	底部片
10-20	1号溝	③	弥生土器	複合 口縁 壺	(14.0)	-	-	(8.5)	ヨコナデ・工具ナデ・摩耗のため不明瞭	ヨコナデ・工具ナデ	A・C	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい黄褐色	10YR7/3	口縁～頸部片 貼付突帯一部残存
10-21	1号溝	③	弥生土器	壺	-	-	-	(10.4)	摩耗のため不明瞭	ハケ目・ヨコナデ	A・B・C・E	良	浅黄褐色	10YR8/3	浅黄褐色	10YR8/3	頸部片 貼付突帯あり
10-22	1号溝		弥生土器	鉢	-	-	-	(5.7)	ナデ	ナデ	A・C・E	良	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR5/2	口縁片
11-23	1号溝	③	弥生土器	高環	(23.0)	-	-	(5.3)	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	A・C・D・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/2	にぶい黄褐色	10YR7/2	口縁片
11-24	1号溝	③	弥生土器	高環	(21.8)	-	-	(4.2)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい黄褐色	10YR7/4	口縁片
11-25	1号溝	③	弥生土器	高環	-	-	-	(14.5)	ナデ・しぼり痕・ヨコナデ	ナデ・工具ナデ	A・B・C・D	良	にぶい黄褐色	10YR7/2	にぶい黄褐色	10YR7/2	口縁・脚部端を欠く
11-26	1号溝	③	弥生土器	高環	-	-	(15.4)	(6.7)	工具ナデ・ヨコナデ	工具ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/3	にぶい黄褐色	10YR6/4	脚部片
11-27	1号溝		弥生土器	器台	(12.6)	-	(14.4)	17.3	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	ヨコナデ・工具ナデ	B・C	良	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	
11-28	1号溝		土師器	埴・鉢	(11.6)	-	-	(5.9)	ナデ・指オサエ後 工具痕	ナデ・タタキ後 ハケ目	B・C	良	明赤褐色	5YR5/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	
11-29	1号溝	⑤	弥生土器	支脚?	-	-	(13.2)	(5.2)	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ハケ目・ヨコナデ	A・C・D・E	良	褐灰色	10YR4/1	褐灰色	10YR4/1	脚部片
11-30	1号溝		土師質 土器	小皿	8.9	-	5.9	1.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・糸切り痕	A・C	良	にぶい褐色	5YR7/3	にぶい黄褐色	10YR7/3	底部に糸切り痕
12-1	2号溝	②	土師器	甕	(23.6)	-	-	(8.3)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/2	にぶい褐色	7.5YR7/3	口縁片
12-2	2号溝	④	土師器	甕	25.6	-	-	(7.2)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・D・E	良	黄褐色	7.5YR7/8	黄褐色	7.5YR7/8	口縁～頸部のみ
12-3	2号溝	④	土師器	甕	-	-	-	(6.3)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・工具ナデ?	A・B・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい黄褐色	10YR7/4	口縁片
12-4	2号溝	④	土師器	甕	-	-	-	(6.4)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	A・B・C・D	良	灰褐色	5YR6/2	にぶい褐色	7.5YR7/4	口縁片
12-5	2号溝	②	土師器	甕	-	-	-	(4.5)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	A・B・C	良	にぶい褐色	7.5YR7/4	にぶい褐色	7.5YR7/4	口縁片
12-6	2号溝	②	土師器	甕	-	-	-	(3.2)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	A・C・D	良	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい黄褐色	10YR7/3	口縁片
12-7	2号溝	④	土師器	甕	-	-	-	(5.9)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・B・C	良	褐灰色	5YR4/1	褐灰色	5YR4/1	口縁片 内面にスス付着
12-8	2号溝	②	土師器	甕	-	-	-	(3.7)	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ	A・B・C	良	にぶい褐色	5YR7/4	にぶい褐色	7.5YR7/4	口縁片
12-9	2号溝	④	土師器	皿	(19.2)	-	-	(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	D	良	浅黄褐色	7.5YR8/4	浅黄褐色	7.5YR8/4	口縁片
12-10	2号溝	④	土師器	皿	(18.2)	-	-	(3.0)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	C・D	良	浅黄褐色	7.5YR8/4	浅黄褐色	7.5YR8/4	
12-11	2号溝	④	土師器	皿	(17.8)	-	-	(3.3)	ヨコナデ・摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	D	良	浅黄褐色	7.5YR8/6	浅黄褐色	7.5YR8/6	

*法量の単位はcm。○は残存と復元値を示す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 F砂粒子 H灰色粒子

第2表 出土土器観察表②

挿図 番号	遺構名	出土 位置	種別	器種	法 量			調 整		胎土	焼成	色 調			備 考		
					口径	胴部径	底径	器高	内面			外面	内面	Hue		外面	Hue
12-12	2号溝	④	土師器	皿	(17.6)	-	-	(2.6)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	D	良	浅黄橙色	7.5YR8/6	浅黄橙色	7.5YR8/4	
12-13	2号溝	②	土師器	皿	(17.5)	-	-	3.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	C・D	良	橙色	5YR7/8	橙色	5YR7/8	
12-14	2号溝		土師器	皿	(16.0)	-	-	(3.3)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	D・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
12-15	2号溝	④	土師器	皿	17.0	-	-	3.2	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	D・E	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	
12-16	2号溝	④	土師器	皿	(17.4)	-	-	(2.7)	摩耗のため不明瞭	ヨコナデ・摩耗のため不明瞭	A・B・C・D	良	にぶい黄橙色	10YR77/3	橙色	7.5YR7/6	口縁片 外面口縁部に黒斑あり
12-17	2号溝	②	土師器	皿	(16.0)	-	-	(2.8)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	B・D	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	
12-18	2号溝	②	土師器	環	(17.2)	-	-	(4.2)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	B・D	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	
12-19	2号溝	④	土師器	環	(15.4)	-	-	(4.8)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	B・D	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	口縁片
12-20	2号溝	④	土師器	環	(14.8)	-	-	(4.2)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	D	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	
12-21	2号溝	④	土師器	環	(14.0)	-	-	(3.4)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	D	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	口縁片
12-22	2号溝	④	土師器	環	(13.2)	-	-	(3.7)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	D	良	浅黄橙色	7.5YR8/6	浅黄橙色	7.5YR8/6	口縁片
12-23	2号溝	④	土師器	環	(13.2)	-	-	(3.7)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ナデ	C・D	良	橙色	5YR7/6	浅黄橙色	10YR8/3	口縁片
12-24	2号溝	②	土師器	環	15.6	-	11.8	4.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	B・D	良	にぶい褐色	7.5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	
12-25	2号溝	②	土師器	環	-	-	(9.3)	(2.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	A・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	底部片、高台あり
12-26	2号溝	②	土師器	環	-	-	(8.6)	(1.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	A・B	良	橙色	5YR7/6	橙色	2.5YR6/6	底部片、高台あり
12-27	2号溝	④	土師質土器	環	-	-	7.3	(1.6)	ヨコナデ	ヨコナデ・回転ヘラ切離し	A・B・C	良	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	底部片
12-28	2号溝		須恵器	甕	(18.6)	-	-	(6.7)	ヨコナデ・当て具痕	ヨコナデ・ハケ目・タタキ	B	良	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	赤焼須恵器 口縁～頸部のみ
12-29	2号溝	①	須恵器	高環	15.7	-	-	(5.2)	回転ナデ・工具痕	摩耗のため不明瞭	B・E	やや不良	灰白色	5Y8/1	灰白色	2.5Y8/2	環部のみ
12-30	2号溝	④	須恵器	環蓋	(15.0)	-	-	1.5	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	E	良	灰色	N6/	灰色	N6/	つまみ径 2.6cm
12-31	2号溝	④	須恵器	環身	-	-	-	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	
12-32	2号溝	④	須恵器	環身	(12.8)	-	-	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	A・B	良	灰色	N6/	灰色	N6/	口縁片
12-33	2号溝	④	須恵器	環身?	-	-	-	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	N5/	灰色	N5/	口縁片
12-34	2号溝	③	須恵器	環身	(14.4)	-	(10.1)	3.7	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	N6/	灰色	N6/	高台あり
12-35	2号溝	①	須恵器	環身	-	-	8.6	(2.6)	回転ナデ	回転ナデ・摩耗のため不明瞭	B・C	不良	灰白色	5Y8/1	灰白色	5Y7/1	高台あり
12-36	2号溝	④	須恵器	環身	-	-	(9.2)	(2.2)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	7.5Y6/1	灰色	7.5Y6/1	底部片、高台あり
12-37	2号溝	④	須恵器	環身	-	-	(9.9)	(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	N6/	灰色	N6/	底部片、高台あり
12-38	2号溝	④	須恵器	環身	-	-	-	(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	7.5Y6/1	灰色	7.5Y6/1	底部片、高台あり
13-1	1号土坑		土師質土器	香炉?	-	-	-	(2.3)	ヨコナデ	ナデ	C	良	灰色	5Y5/1	灰白色	2.5Y8/2	脚部片
14-1	P1		土師器	甕	-	-	-	(7.9)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	B・C・D	良	にぶい橙色	5YR6/4	にぶい橙色	5YR6/4	口縁片
14-2	P1		土師器	環	(13.0)	-	(11.0)	2.8	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	C	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	
14-3	P2		土師器	甕	-	-	-	(7.8)	摩耗のため不明瞭	ヨコナデ・摩耗のため不明瞭	D	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	端部片
14-4	P3		土師器	甕	-	-	-	(6.0)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目	B・C・D	良	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	口縁片
15-1	一括		弥生土器	甕	(25.2)	-	-	(7.5)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	灰黄褐色	10YR6/2	口縁片
15-2	一括		弥生土器	甕	-	-	7.1	(5.2)	指オサエ・指ナデ?	ナデ	A・B・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい橙色	7.5YR7/4	底部片
15-3	一括		弥生土器	複合口縁壺	(16.6)	-	-	(4.7)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	明褐色	7.5YR7/2	明褐色	7.5YR7/2	口縁片 刻目あり
15-4	一括		弥生土器	複合口縁壺	-	-	-	(4.7)	ヨコナデ・工具痕・ハケ目	ハケ目・ヨコナデ	A・C・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	口縁片(端部なし)
15-5	一括		土師器	甕	(19.8)	-	-	(5.4)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	口縁片
15-6	一括		土師器	甕	-	-	-	(6.0)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	A・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	口縁片
15-7	一括		土師器	高環	-	-	-	(4.7)	工具ナデ・摩耗のため不明瞭	工具ナデ・摩耗のため不明瞭	F	良	淡褐色	5YR8/4	淡褐色	5YR8/4	頸部片
15-8	一括		土師器	龍把手	-	-	-	(6.0)	指オサエ・ナデ・摩耗のため不明瞭	指オサエ・ナデ	D	良	浅黄褐色	7.5YR8/4	浅黄褐色	7.5YR8/4	把手のみ
15-9	一括		須恵器	環身	8.6	-	-	3.0	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	E	良	灰黄褐色	10YR5/2	褐灰色	10YR5/1	受け部径 10.6cm 外面底部にヘラ記号あり
15-10	一括		須恵器	環身	-	-	-	(1.9)	回転ナデ後ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	B・C	良	灰色	N5/	灰色	N5/	高台あり

※法量の単位はcm。○は残存と復元値を示す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 F砂粒子 H灰色粒子

第3表 出土石器観察表

図版	番号	遺構名	器種	法 量 (c m)			重さ (g)	備 考
				最大長	最大幅	最大厚		
7-6	2号竪穴No.3	紡錘車	滑石	3.9	4.0	1.3	36.32	孔径0.7cm
11-31	1号溝	二次加工剥片	黒曜石	1.75	1.85	0.55	1.67	



調査区近景（北から）

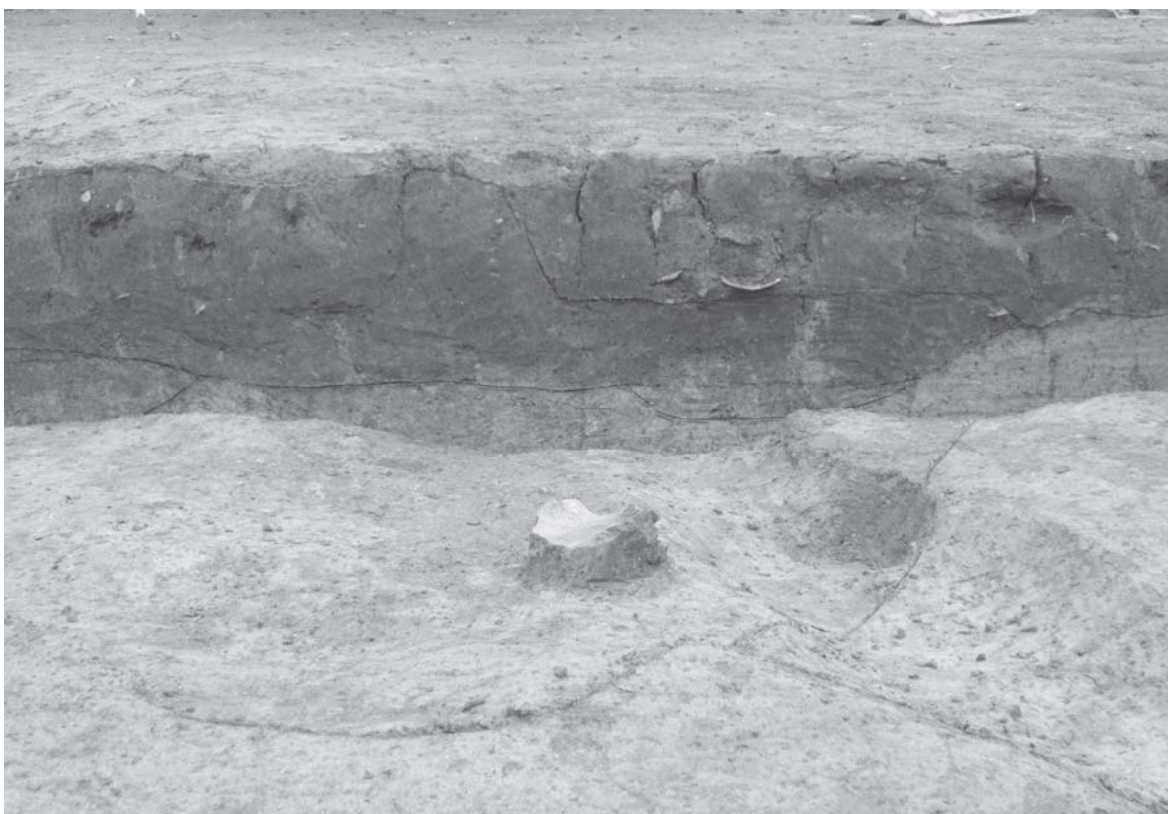


調査区全景（画面右が北）

写真図版 2



1・2号竪穴建物、3・4号溝と調査区壁面土層（北西から）



1・2号竪穴建物と4号溝切り合い付近土層



① 掘立柱建物 (南から)



② 1号溝 (南東から)



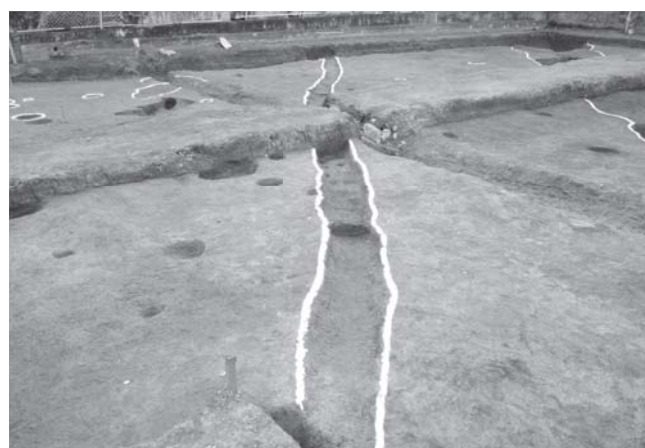
③ 1号溝断面土層



④ 2号溝 (南東から)



⑤ 2号溝断面土層



⑥ 3号溝 (南東から)

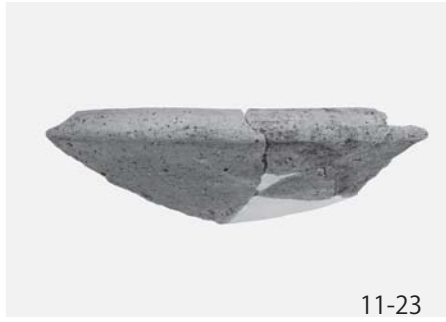
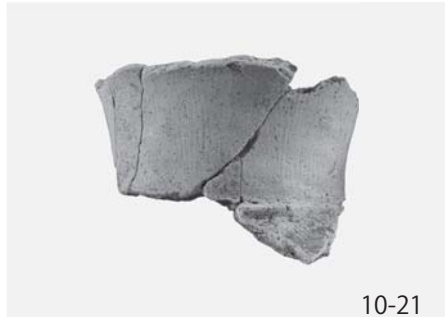
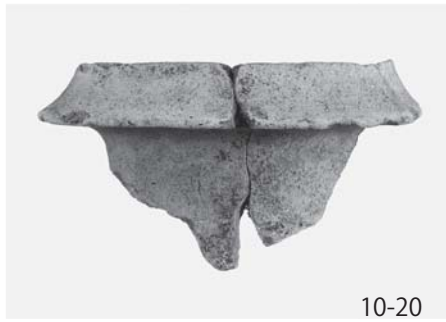
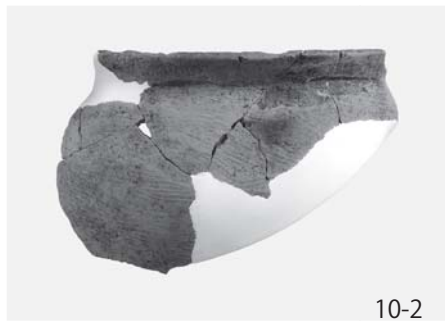


⑦ 1号土坑 (北東から)



⑧ 2号土坑 (西から)

写真图版 4





11-31



12-2



12-13



12-24



12-25



12-15



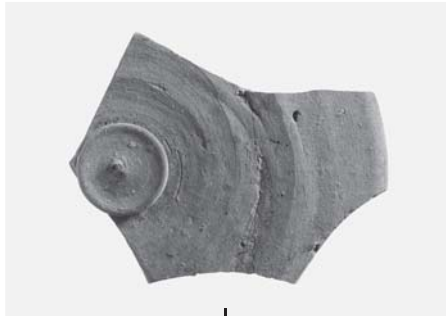
12-29



12-27



12-28



12-30



12-34



12-35



12-36



13-1



15-3



15-8



15-9

報告書抄録

ふりがな	ひたじょうりいせきとびやちく2じ
書名	日田条里遺跡飛矢地区2次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第134集
編著者名	行時 桂子
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-8601 日田市田島2丁目6-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2018年3月23日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
日田条里遺跡 飛矢地区2次	大分県日田市田島 2丁目	44204-6	204043	33° 19' 13"	130° 56' 27"	20150709～ 20150918	488 m ²	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日田条里遺跡 飛矢地区2次	集落	弥生時代 奈良時代	竪穴建物2 掘立柱建物1 溝4 土坑3 ピット	弥生土器 土師器、須恵器 土師質土器 石器	弥生時代後期と奈良時代の溝。特に奈良時代の溝は規模が大きく、近隣に位置する大波羅遺跡の奈良時代の公的施設との関連が想定される。

要約	<p>日田条里遺跡飛矢地区は、これまでに建物建設に伴う発掘調査（以下、1次調査）で弥生時代～古代の竪穴建物や溝などからなる集落が確認されている。</p> <p>今回の調査地は1次調査地の北約50mの位置にあたり、水田基盤土直下で竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・ピットが確認された。特筆されるのは、調査区を南東から北西に向かって横断する規模の大きな1・2号溝である。これらはほぼ並行するものの其々で出土遺物の時期が全く異なる。しかし遺物の出土状況や溝の埋没過程に共通点が見られること、また予備調査の内容から、本来は7世紀後半から8世紀前半にほぼ同時に存在しており、埋没の最終段階（11世紀以降）に周辺の掘削等に伴い出土した遺物を廃棄するなど二次的廃棄が行われた可能性が考えられる。</p> <p>埋没の最終段階まで堆積土中に殆ど遺物を含まないことから、溝としての機能維持がかなり意識されていたことが想像され、本遺跡の北東にある大波羅遺跡で推定されている公的施設との関連が想定される。</p>
----	--

日田条里遺跡飛矢地区2次

日田市埋蔵文化財調査報告書第134集

2018年3月23日

編集 日田市教育庁 文化財保護課

877-8601 大分県日田市田島2-6-1

発行 日田市教育委員会

877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 日田時報紙器印刷株式会社

877-0086 大分県日田市二串町345-3



日田市